

ウォルター少年と、夏の休日 (SECONDHAND LIONS)

2004 (平成16) 年 7 月 22 日 鑑賞 (梅田ピカデリー)

★★★★



監督・脚本＝ティム・マックカンリーズ／出演＝マイケル・ケイン／ロバート・デュバル／ハーレイ・ジョエル・オスメント／キアラ・セジウィック／ニッキー・カット／エマニュエル・ヴォージュア／ジョシュ・ルーカス／ケヴィン・ハバラー／クリスチャン・ケイン (日本ヘラルド映画配給／2003年アメリカ映画／110分)

……原題と全く異なる邦題は、この映画の本質を見事にとらえた久々の大ヒット！ 14歳の孤独な少年が、2人の頑固で偏屈なおじいさんから学んだもの、それは、本物の男とは？ ということ。この夏休みの体験によって、ウォルター少年の価値観や生き方は完全に転換した！ 「男に必要なものはAとBとCだ」と自らの体験をもって教える本物の男たち。さてこの3つ、あなたならどう考えるか……？ 今どきの、日本の男の子の夏休みの学習用教材として最適の映画……。

本物の男とは？

この映画のテーマは、「本物の男とは？」ということ。しかし、これは難しい問題。人によって、またとらえ方によって、当然その回答は変わってくる。しかし、この映画が14歳の孤独な男の子ウォルター（ハーレイ・ジョエル・オスメント）に対して示す答えはシンプル。それは、テキサスの片田舎の農場に住むガス（マイケル・ケイン）とハブ（ロバート・デュバル）という2人の頑固で偏屈なおじいさんが、過去と現在の行動で示す、「男に必要なものは、名誉と勇気と高潔さだ」というもの。

母親から嘘をつき続けられ、虚構の世界ばかりを見せ続けられてきたウォルター少年だったが、この14歳の少年の感受性は、このおじいさんたちとの出会いと生活の中で突然花開き、それまで笑顔のなかった少年の顔が、急にイキイキとした本来の少年の顔に……。

きっかけは1枚の写真

ウォルター少年には父親がいない。母親のメイ（キーラ・セジウィック）がウォルターを育ててきたが、メイは身持ちの悪い母親。子供には嘘ばかりついて自分は遊び回り、男性関係もハデそう……。夏休み期間中もウォルターを、おじさんにあたるという2人のおじさんに預けようという身勝手さ。そして自分は、タイプ学校で勉強するというのだが、果たしてその真偽のほどは……？

有無を言わず連れてこられ、置き去り同然とされたウォルター少年が、おじさんたちの家の中で見たものは……？ それは、1枚の古ぼけた写真。そこに写る美しい女性は一体誰……？ この1枚の写真がきっかけとなり、無口で孤独な14歳の少年と、頑固で偏屈な2人のおじさんたちとの「対話」が始まっていた。

原題と邦題

この映画の原題は、『SECONDHAND LIONS』というもので、これは「中古のライオンたち」という意味。その意味は、この映画に現実に登場してくる老人(?)のライオンが果たす役割をみれば理解できるが、逆にいえば、このタイトルだけでは何のことかわからない。いわば、映画の中身からつけられたタイトル。

そこでつけられた邦題は、『ウォルター少年と、夏の休日』というもので、これはいわば、映画の外観からつけられたタイトル。これならどんな映画かが誰にでもわかるから、その名づけ方は久々のヒット作！ もっとも、映画を見終わった後のタイトルの重みを比較すると、原題の方がベターかも……？

母親の真の目的は別に……？

この偏屈なおじさんたちの家には、セールスマンがわざわざいろいろなものを売りつけにくる。さらに、親戚の家族も「さびしいでしょう？」と猫なで声で、ゴマすり風にすり寄ってくる。それはなぜか？ それは、ハブとガスが大金を持ったまま、ここで隠遁生活をしているという噂があるから。

ウォルターの母親のメイが、夏休み中ウォルターをここで生活させようとした

のは、自分が好き放題したいことの他に、ウォルターに大金のありかをさぐらせて、その分配にあずかろうというしたたかな計算があったから。そのためメイは、ウォルターにくれぐれもお金のありかをさぐるようにと強く言い残して出ていったが……？

ホントにホント！

ウォルター少年からの質問に対してガスとハブが語る話は、数回にわたって登場するが、それは何とも荒唐無稽な物語の数々。

まずその基本ストーリー（？）は、1910年代、アメリカからヨーロッパ大陸にわたった2人は、酔いつぶれたところを連れ去られ、フランスの外人部隊に入れられることとなり、北アフリカでの数々の戦闘に参加することになったというもの。ホンマかいな？

次にそんな中、ハブは族長の美しい娘ジャスミン（エマニュエル・ヴォージュア）と知り合い、2人は恋に落ち結婚した。ところが、ジャスミンには婚約者の部族長がいたため、ハブには多額の懸賞金がかけられ、ハブは数々の危険にさらされることに……。

そして、遂にハブはつかまったが、実はこの手引きをしたのは、ガス。ガスは、まんまと懸賞金を受け取った上で、ハブを釈放した。そして、ハブとの最後の対決において2度もハブから助けられた部族長は、その後二度とハブを追うことはなくなったというもの。これもホンマかいな？

さらに話の第3弾は、「それでは、なぜそのジャスミンはここにいないの？」と質問するウォルターに対するハブの答えで、これはシンプル。すなわち、「ジャスミンは子供を産む時、子供とともに死んでしまった」という悲しいもの。そしてそれによって、ハブは再び外人部隊に戻り、40年間戦い続けた後引退し、今の生活があるというのだ。ホンマかいな？

そうすると、ハブとガスが大金を持って生活しているというのはホンマで、その大金とはそこでせしめた懸賞金……？

突然変わる『アラビアン・ナイト』（42年）や『バグダッドの盗賊』（24年）のような画面に登場する若き日のハブ（クリスチャン・ケイン）とガス（ケヴィ

ン・ハバラー)の姿は、マンガみたいにカッコいいし、お姫様も美しく、おとき話そのもの。君はこんな話、ホントに信用できる……？

『SECONDHAND LIONS』が教えてくれるもの？

ハブとガースの2人がお金をタツプリと持っているのは、ホントの話のよう。ウォルターの勧めによって、2人は射撃を楽しむための大層なおモチャ(?)を買ったり、撃ち殺すため(?)のライオンを買ったり、さらにはキリンまでも……。もっとも、この撃ち殺すために買ったライオンは、ヨボヨボの老人(?)だったから、オリから飛び出すこともなく、騙される結果に……。

しかし、何が幸いするかわからないもの。この中古のメスライオンは、ウォルターの友人(?)となり、ほどほどの野生(?)を取り戻し、老人、子供たちと共存していくことになった。

そして、この映画の中で彼女は、ある大きな役割を果たしたうえで、ハブやガースと同じように大往生を……。さて、その中古のライオンが果たした大きな役割とは……？

老人たちのあくなき趣味は、幅広い。ハブが今度買ったのは、本物の複式の翼をもった飛行機ときた。映画の冒頭のシーンは、2人の老人がこの飛行機に乗ってはしゃぐシーン。そして、恐れずタネを明かしてしまうと、最後は、この大人のオモチャ(?)の事故によって、笑いながら大往生を遂げたという報告を、成人したウォルター(ジョシュ・ルーカス)が聞くというストーリー構成となっている。

そして、最後にそこに登場する思いがけないもう1人の人物とは……？ そこまで言ってしまうとさすがにヤバイので、それは……？

少年は何から学ぶのか？

テキサスの片田舎にあるこの老人たちの家には、電話もないしテレビもない。また夏休み中というのに、ウォルターは教科書を持ち込んできた様子もない。母親のメイが教育熱心な母親でないことはわかるが、これではあまりにも子供への教育的配慮がなさすぎるというものだ。「学校や先生は一体何をやってるんだ！」

と日本ではなりそう……？

ここで考えるべきことは、「少年は、一体何から学ぶのか？」ということ。感受性の豊かな少年にとって大切なことは、何よりもその想像力をかきたてるような刺激を与えてやること。

私の少年時代、『トムソーヤの冒険』や『十五少年漂流記』などの少年冒険小説がイッパイあり、それらを読んで想像力をかきたてるだけで、自分の世界はいくらでも広がり、ありとあらゆることを体験(?)できたものだ。しかし今は……？

毎日テレビでくり返される画一的でバカバカしいバラエティー番組。そして多分、本音を語る事ができる唯一のチャンネル(?)として存在している(?)友人との携帯電話やメールの交換。大人たちから刺激的な話を聞いたり、一緒に野山を走り回ったり、そんな「学習」を全く体験したことの無い今時の日本の少年たちは、ホントに不幸なもの。少年は何から学ぶのか！

この根本問題を十分議論した上で、今の日本における「学習指導要綱」を根本から改めなければ！

2人の名優と1人の名子役

この映画を支えるのは、2人の名優と1人の名子役。名子役のハーレイ・ジョエル・オスメントは『シックス・センス』(99年)で、11歳にしてアカデミー賞助演男優賞にノミネートされたのをはじめ、『ペイ・フォワード/可能の王国』(00年)や『A.I.』(01年)でも達者な演技を見せてきた名子役。16歳となったハーレイ・ジョエル・オスメントにとって、この映画での14歳のウォルター少年の役は、いかにもピッタリのはまり役。しかし、正直なところ私は、その演技についてはホントにうまいのか、それとも作りすぎているのかという疑問をもったのだが……？

他方、ハブ役のロバート・デュヴァルは、この映画では、若い時も老人となった今も武闘派(?)ながら、少しずつウォルターに心を開いていき、そして逆に少年からも、自分の生き方や幸せとは何かということを見せてもらおうという、ちょっと変わった老人役。先日観たケビン・コスナー監督・製作・主演の『ワイル

ド・レンジ（最後の銃撃）（OPEN RANGE）』（03年）でのカウボーイの役より、よほど内容の濃い役柄をうまく演じている。

そして、ガス役のマイケル・ケインは、最初からウォルターとの対話に乗ってやることによって、ウォルターの心を開かせるというホントはやさしい老人の役回りを実にうまく演じている。

とにかく、この映画の主演は、老人2人と子供1人というアンバランス（？）な配役で成り立っている、ちょっと変わったもの……。

日本の夏休み中の少年諸君に超おススメ！

今、夏休み用の映画が真っ盛り。その代表作は、『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』（04年）とこの『ウォルター少年と、夏の休日』の2つだが、私はこれをおススメ。なぜなら、それはきっと少年たちは、この映画を観て何かを学ぶことができると思うから。

『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』も子供たちは楽しく観るだろうが、それは少年たちの夢の世界を広げる効果はあっても、人を深く観察する学習にはならないし、「本物の男とは？」を考えるきっかけになることはないだろう。しかし、この映画は……？ 55歳の私にとっては、多少バカバカしいと思いながら観ることがあっても、これを観る感受性豊かな少年たちは、きっとここから学ぶものがたくさんあるはず。

ちなみに、席を1つあけて私の隣に座り、1人で観ていた70歳ぐらいの老人は、子供と同じように要所要所（？）で声をあげて笑い、かつ感嘆の声をあげていたから、ホントに子供と同じようにこの映画を楽しんでいたはずだ。ひょっとしたら、ちょっとボケかけた老人の感受性にも、この映画は最適？

すると、夏休みの少年向けだけではなく、老人養護ホームでもこの映画の上映会を開いてはどうだろうか？

さらに、この映画に限って配給会社は「老人特別御招待ツアー」でも企画してはどうだろうか……？

2004(平成16)年7月23日記